

しお

第11期 石塚 佑飛

「しょっぱい (塩っぱい)」という言葉は、「しおはゆい」が転じた言葉であり、漢字では「鹹い」と書く。「鹹い」は「辛い」の古語であり、また、「鹹」は「塩」と同じ意味を持っている。つまり、「塩っぱい」と「辛い」は根底で同じ意味であると言いうるであろう。

大学生活は、人生の“夏休み”だとか“レジャーランド”だとか揶揄されている。その大学生活の半分、すなわち日吉での2年間は、私にとってまさに“夏休み”にクーラーの効いた部屋でスイカを食って一日を過ごすような生活であった。その“夏休み”において、私が唯一得られてものといえば、TOEICのスコアが入学当初から200点ほど上がったことであろうか。振り返れば、あまりにも何も残っていない2年間であった。そして、私は、クーラーの効いた部屋で、熱くなっている人々を眺めては、羨望のまなざしを向けるものの、どのように彼らのようになれば良いのかわからずにいた。

そんな日吉での2年間も終わりを迎えようとしている時、私は小野ゼミに出会った。その出会いで感じた小野ゼミの印象は、「熱い」である。小野ゼミ生は、夏の暑さを満喫していた。私は、そんなゼミ生の姿に惹かれた。そして、自分の生活を変えるため、入会を決めたのである。

ゼミに入ってからというもの、もちろん楽しいこともあったが、辛いこともたくさんあった。どう頭をひねっても、どんなに議論をしても何も生まれない一日をグル学で過ごしたことも何度もありすぎて、もう数など覚えていない。今までの人生で食べてきたパンの枚数を覚えていないのと同じである。

ゼミに入ってからというもの、私の“夏休み”は変わった。何よりも時間の経過が早くなった。ようやく“夏休み”を充実できているという実感があった。味気無い大学生活がとても美味しくなった。想像してほしい、夏の暑い中、外で冷えたスイカに塩をかけたら、どんなに旨いか。スイカに“塩”をかけると美味しく感じるのは味の対比効果と呼ばれる現象である。塩があることによって、より甘さが引き立つというわけである。辛さの中に楽しさがあり、辛さがあるから達成感があるのである。このことを私は、身をもって実感したのである。

小野ゼミは“塩”である。人間に“塩”が必要不可欠であるのと同じように、私には小野ゼミが必要不可欠であったのだ。だから、私は、小野ゼミを形作ってきた、小野晃典先生をはじめ、先輩方、同期、後輩の皆さまに感謝したい。このような成長する機会をいただきありがとうございました。今だから言える、エグゼミは、「辛い」けれども、「辛い」は必要で、「辛い」は「幸せ」の一手手前であると。2年間の三田生活において、小野ゼミ以外の思い出は皆無であるけれども、それで良かったと、今なら心から思える。繰り返しになりますが、本当にありがとうございました。